

き起こす事と思はれる。

とまれ本書は背後のエリユデシヨンの裏打ちを持つた程度の高
いエツセイとして、亦ごくありふれた平明な言葉の連続にも不拘
ひし／＼と直接讀者の胸に通ずる新しい型の名文として、一般に
讀まれ、廣く歴史の活眼の開かれん事を希んで止まない。(弘文
堂發行、定價二圓三十錢)〔豐田〕

長壽吉博士選曆記念

西洋史論叢 政治と思想

本書は西洋近世史の一大權威として、多年本邦史學界に重きを
爲された長壽吉博士が、華甲の壽を迎へられるに當り、博士の學
徳に報ゆる爲めに編輯された論文集であるが、此の種の論文集を
世に送る事は實に我が邦西洋史學界にとり嚆矢の出來事であつて
此の點斯學の發展を如實に示すものと云ひ得るであらう。

收める論文十六篇、學界の耆宿、長・大類兩博士はもとより、
東京、京都、東北、九州、廣島とおよそ西洋史學の講座の存する
大學の總てを盡し然も第一線に立つて指導的役割を演じてみられ
る各權威が長博士の爲めに、その專攻の領域に於て健筆を振はれ
た事は正に壯觀と云ふ他はない。然し乍らその爲め却つて綱羅の
弊に陥り、きのきいた本書の表題にいさゝかそくはない感なきに
しも非ずは致し方のない事である。

各篇孰れも最高の水準を示す中にも別して原隨園博士の「エホ

スにみゆる希臘政治思想」、鈴木成高氏の「莊園の構造」、平塚博氏
の「ペトラルカのモン・ヴァントウ登攀」、讚井鐵男氏の「佛蘭西革
命時亡命者の思想動向」等の珠玉の篇は、本年度學界の稔多き收
獲として特筆されるべきものあらう。拙き紹介を終へるに當り長
博士が今後も愈々踴躍として斯道の爲めに御貢獻下さらん事を
祈つて止まない次第である。(東京富山房發行、定價六圓三十錢)
〔豐田〕

東亞地政學序說

米倉二郎著

世界の天地をどよもして硝煙がたちこめてゐる。

混沌のうちよりあたりしきもの生れ出づる歴史の壯大なる序
曲である。

亞細亞は今、新しき歴史の、新しき世界の創造者として吾々の
前に在る。そして地理學も亦永い發展の歴史のうち、あたらし
き、眞の地理學が胚胎し、時代を新しく創り、而して新しき世界
を政めてゆくものとして地政學が登場する。

米倉二郎教授著「東亞地政學序說」はまことに此のやうな秋に、
永きにわたる眞摯なる研鑽努力の後に上梓せられたものである。

題して東亞地政學と言はれるが、もとより之は全世界の中核た
る大東亞の地域を、日本地政學の指導理念に依つて論究考察せら
れたものである。

東亞の地たるや廣裕にして、雄大、之を一望の下に把握する極めて至難事に屬するが、本書はよく、此の複雑多彩なる、世界最大の大陸と最大の海洋を包攝する廣域大東亞の性格のうちに、統一性を説き、本來皇國を中心に一體的關係を把持し、統一の構成を有するものであることを地理と歴史の綜合の上に、即ち時空一如の見地に於いて自然、民族、社會、政治、經濟、軍事等各方面より犀利精緻なる論考を加へられてゐるのである。

序の現代の歴史的な性格に於いては新しき中世の始まらんとする現代の性格を明確にまた熱情をもつて語られ、第一章東亞地政學の本質に於いては、世界觀と地理學より日本、支那、西洋政治地理學史を要領よく論述せられ最後にそれらの上に發展する東亞地政學の内容に説き及んでおられる。第二章世界新秩序の構圖に於いては東亞以外の世界各廣域圏の諸條件を比較検討せられ、遂ひに其等に類絶して最も優れたる廣域圏の大東亞たる所以を明にせられ、次章大東亞の自然、民族、社會に於いて夫々詳述せられる。第四章大東亞の軍事地理は著者の特に多年專攻せられる得意の地域たる支那に於ける軍事地理を詳細に論究せられたものである。過ぐる昭和十三年支那事變の始にあたり此の研究は特に序にも記されてゐる如く、適當なる方面に呈出せられ、端的に實踐的役割を果たしたことを記さねばならない。第五章大東亞の政治地理のうちには各地域別による銳利なる地政學的考察が行はれ、次章大東亞の經濟地理に於いては資源、國土計畫等最要なる課題の明確なる説明がなされてゐる。結語の大東亞並に世界の新秩序に於いて大東亞こそ世界の核心であり、東亞の新秩序は即ち全世界

界の新秩序をもたらす所以を説かれる。

まことに本書は、嚮に高く掲げられた小牧實繁教授の「日本地政學宣言」の理念にもとづく具體的な大東亞廣域の綜合的論究であつて、夥しき在來の東亞關係の平叙紹介地理書、或ひは翻譯地政學書の氾濫するうちに燦然として高く聳へるものである。

今日吾々に課せられたる光輝ある大東亞國建設の聖なる大事業に挺身するに當つて、最良の指導的東亞地政學の書として世のあらゆる識者に精讀を薦めるものである。(昭和十六年十月、生活社刊、二二六頁、定價二圓八十錢)(藤野義明)

印度支那(佛印、タイ、ビルマ)

——世界地理政治大系 第三卷——

室賀信 夫著

大東亞戰爭勃發以來、北方を忘失したのではないけれど、我々國民の注視は一樣に南方に向けられてゐる。南方圏は、それに對する我が國民の意識の昂揚と共に一般の深き關心を惹起せしめたのである。

本書は標題の示す如く、其等南方圏の中、佛印、タイ、ビルマ、英領マレーの四國を含む、所謂印度支那半島を取扱つたものである。自然はこの半島を幾何かの地域に分け乍ら、而も一の地域に統一せしむべき季節風、海流等の契機を附與してしたのであるが、それを分割し、又相互の交渉を妨げたものは此所に強權支